

中越防災安全推進機構主催
2016年度防災教育コーディネーター養成塾第2回(2017.02.26)
「防災教育プログラム開発の基礎知識」講義録追補版

※講義スライドは下記 URL より閲覧・ダウンロードできます。

<https://www.slideshare.net/KenyaMiyazaki1/220170226>

(記載方法)

スライド番号
内容

1～2

公開用メモ

3

ただいまご紹介いただきました、防災教育普及協会事務局長の宮崎です。よろしくお願ひいたします。僕は中越とご縁があります。2004年の中越大震災当時、社会福祉を学ぶひとりの学生ボランティアとして活動していました。まわりは皆、社会福祉士の国家試験の勉強や就職活動などで慌ただしくしている時でしたが、僕は「いま、活動しなければ必ず後悔する」という思いがあって、活動を続けました。エントリーシートも書いたことがないし、企業説明会も参加したことがありません。国家試験も受けましたが不合格でした。その後、改めて勉強し直して合格しています。

活動の経験もあって、現在の職務のひとつである「災害救援ボランティア推進委員会」を運営する財団にお声がけいただき無事に就職できました。中越の地震がなければ、今、僕はここにいなかったかもしれません。こちらには長岡をはじめ4つの施設があると思いますが、山古志に施設ができたとき、記念のスタンプラリーが行われたのですが、4つの施設を全て回った第一号は、僕なのです。関係者で申し訳ありません。言葉は適切ではないかもしれませんが、それくらい、嬉しかったのです。

そんな皆さんに防災教育を語るというのはおこがましいという気持ちもありますが、恩返しのお気持ちも込めて、お話をさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

4～5

2月14日に学習指導要領の改定案が公表されました。今日のお話と関係しますので、話題提供としてご紹介します。大事なポイントはいろいろありますが、防災教育との関連について触れていきます。

まず「社会に開かれた教育課程の重視」ですが、これはキャリア教育や地域教育と関わってきます。東日本大震災以降、民間企業等がCSR活動、社会貢献活動のなかで復興支援や

防災に取り組む事例も増えています。防災教材やプログラムをつくる会社等も増えており、今後は防災教育の分野でも民間企業との連携が増えていくのではないかと思います。僕が関わる東京都の防災教育プロジェクトにもスポンサー的に企業のご協力を得ており、コーディネーターの皆さんも地元企業や社会貢献に熱心な企業等との連携も、視野に入れておくの良いのではないのでしょうか。

次に「現行学習指導要領の枠組みを維持した上で、知識の理解の質を高める」という点です。これは「アクティブ・ラーニング」という言葉に代わり「主体的・対話的で深い学び」という表現が使われていることにも関係します。アクティブ・ラーニングという言葉だけが先行してしまい、話し合いの型式を取り入れればよい、アクティブ＝活動的＝体験活動をすればよい、といった考え方が見られることに対する課題提起でもあります。

「とにかく何か話し合わせる・体験させればよい」のではなく、3つの柱と言われる「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かい合う力、人間性等」に基づき、全ての教科で、質を高めるための改善が求められています。

特に僕が防災教育で大事だと考えているのが「何のために学ぶのか」という、とても基本的で根本的な問いかけを、指導者やコーディネーターが意識するということです。特に主体的・対話的で深い学びにつなげていくためには、学習者自身、児童生徒が「なぜ、このこと（防災に関するテーマ）を学ぶのか、自分の生命・生活・人生にどう影響するのか」ということを理解していることが前提となります。つまり、指導者やコーディネーターが「何のために学ばせるのか」を明確にできていなければ、児童生徒の主体性・対話性、深い学びにつなげることに難しいと言えます。

本講義の結論を最初に申し上げますが、プログラム開発の基礎知識であり鉄則であるのは「何のために学ぶのか、目標を明確化すること」、そして「成果を確認し、改善し続けること」です。口で言うのは簡単ですが、実際に実践を前にすると悩むこともたくさんありますので、ヒントというか目安は必要だと思っています。本講義が、皆さんのコーディネーターとしての活動のヒントになれば幸いです。

6

本講義は次のような流れで行います。まず本日の学習テーマの確認です。その後、防災教育教材を使ったアイスブレイク、学校家庭地域における防災教育実践のコツ、プログラム開発手法の基礎知識、効果的な防災教育教材の活用と教材紹介、地域における防災教育実践スタートアップ例、防災ゲーム Day2017in そなエリア東京 (7/2) の紹介、となります。

7～8

はじめにコーディネーター養成塾の到達目標を確認しておきましょう。『学校教育に対する理解と知識を身につけ、さまざまな関係者と信頼関係を築きながら、お互いの立場が尊重でき、子どもたちの「生きる力」を育むことに対して、自分の可能な範囲でできることを考え、積極的に関わる意欲を持つ人材』、になれたと皆さん自身が思えることが到達目標で

す。本講義では特に「関係者と信頼関係を築く」、「互いの立場を尊重する」、「自分の可能な範囲でできることを考える」といった点につながるようなポイントをお話します。

9～14

「自分の可能な範囲」ということにつながる知識・技能を確認するアイスブレイクを行います。このアイスブレイクでは、NPO 法人高齢者住まいる研究会が作成した「まちの BOSAI マスター」という神経衰弱のルールに基づくカードゲームを使います。

各班に配布されたカードは2枚1組になっていて、防災に関する言葉が書かれています。カードを裏返しにしてバラバラにし、神経衰弱のルールでカードを当てていきます。ただし、途中で「災害カード」を引いてしまったら、場のカードをシャッフルします。これを時間内まで繰り返します。

本養成塾の特別ルールとして「当てたカードの内容を説明する」を加えます。皆さんであれば問題ないはずですが、防災に関する用語を正しく理解できているか、分かりやすく説明できるかが問われます。

防災教材として使用する場合は、ルールがシンプルであること、カードをめくる過程で用語を何度も確認し覚えられること、記憶力など特定の児童生徒だけに有利な条件が緩和される（誰もが平等に楽しめる）こと、何度も災害カードを引くうちに助け合いが生まれる場合があること、カードの内容をアレンジできることなどがあります。

15

防災教育プログラムはシンプルであるべきだと考えています。「シェイクアウト訓練」はそのひとつの形です。「地震が起きた時に身を守るために必要なことは何か」を突き詰めていくと揺れが収まるまでは「まずひくく、あたまをまもり、うごかない」というシンプルな行動になります。

知識・経験があると、いろいろな場面や状況を想像できます。ですから、その場面や状況に応じていろいろと伝えたくなると思います。「こういう場面ではAで、こういう場面では、こうなったらCで…」と。ですが、**授業の時間で学べる内容には限界があります。どんなに丁寧に入れても、コップにバケツの水は入りきらないのです。**内容が増えれば増えるほど、複雑になればなるほど、理解や習熟に個人差が出てきます。防災教育はその理解や習熟度の違いが命の危険につながる可能性をもっています。冒頭で述べたように「ただやればいい」のではなく、確実に伝えるべきことがきちんと伝わらなければいけない。**「1つのテーマで、1つの目標」でシンプルかつ確実にメッセージを伝える方法を考えることが、防災教育プログラムづくりの基本になります。**

シンプルであることと、イージー（易しい）ことは同じではありません。シンプルであるためには「今回の防災教育の目標・目的はどこにあるのか」をよく考えて、余計なもの、今回では不要なものを削ぎ落としていく過程が必要です。そうして残ったものが「シンプル」なプログラムになります。

16

防災に詳しい方が、アイスブレイクでカードの言葉を全て完璧に、かつ簡潔に、分かりやすく説明できたとしましょう。ですが、限られた時間でその全てを説明すれば良い防災教育になるか、と言えそうですではありませんね。

防災について詳しいことと、適切な防災教育ができることは、同じではありません。逆に、知識や経験がない人は防災教育ができないということでもありません。もちろん、最低限の知識や経験は必要ですが、専門家でなくても教えられることはたくさんあります。本養成塾で僕が理解している「自分の可能な範囲」とは「どれだけ防災について詳しいか」ではなく**「知識や経験のなかから、対象に必要なものを探し出せるかどうか」**なのではないでしょうか。

17

次に「関係者と信頼関係を築く」ためのポイントをご紹介します。それは「学校・家庭・地域における防災教育のあり方を理解する」ということです。

18

誤解されがちなのが「学校はあくまで教育の場であって、防災施設ではない」ということです。「学校は地域の避難所になるのだから、生徒や地域のために防災教育や対策をして当然だ」という感覚だと現場の先生方や管理職から反発を受けてしまうこともあるかもしれません。教育の場としてやらなければならないことは多く、防災教育もやらなければならないと分かっているにもかかわらず、時間や人手が避けられないという現実もあります。

地域・家庭の中でも同様です。「防災は誰にでも必要だから、やって当然だ」と言われても、生活環境や家庭の事情は様々です。ひとりひとり、そしてそれぞれの家庭に都合があります。必要だ、やるべきだと言われてもできないこともあるのです。

防災教育コーディネーターは、理想に燃えるだけでなく、現実をきちんと把握・理解したうえで、どのようなことができるかを冷静に検討、提案しなければなりません。そのことに気が付かないと、いつの間にか周囲の信頼を失い（あるいは信頼されすぎて）「自分以外に頑張っている人がいない」という孤立した状況をつくってしまいます。

学校・家庭・地域の「エンジンがかかりきっていない状態」から、いきなりアクセルを踏み込むのはトラブルの元です。はじめて関わる場合などは、関係者との信頼関係づくりや意識啓発につながるような活動が求められます。

19～21

その意識啓発につながる事例として、釜石東中学校の防災教育についてご紹介します。既に皆さんはご存知のとおりですが、大事なことは「主体的な取り組みが生徒の印象に残っていた」ということです。

23～25

アクティブ・ラーニング、「主体的・対話的で深い学び」、あるいは思考力・判断力等につながるような学習方法を提案される方も多いと思いますが、先の事例がその根拠となります。ですがただ「何となく話し合わせればいい」というのでは、教育の専門家である先生・学校の信頼を得ることは困難です。

アクティブ・ラーニング的な手法のメリット、デメリットを理解し、先生方からのアドバイスも参考にしながらプログラムをつくるのが信頼関係づくりにつながります

26

次に「相手の立場を尊重した防災教育実践」です。相手の立場を尊重するためには、まず相手のことを知らなければなりません。学校現場についての説明は第3回にもあるかと思いますが、本講義では『地域における防災教育実践の手引き』に基づき、ご紹介します。

27

手引きには防災教育実践の5か条があります。それぞれが「相手の立場を尊重する」ということにもつながってきます。

① 地域の特性や問題点、過去の被災経験を知ること。

自分の知識・経験だけでなく、必ず実践の地域や学校の特性、課題、過去の被災経験などを調べてから実践します。

② まずは行動し身をもって体験すること。

はじめて防災教育に取り組む場面では、先生もコーディネーター側も、指導者（先生）も不安があります。うまくいくかどうか分からないこともあります。ですが「災害が起きてから失敗するよりはいい」といったくらいに考えることも大切です。

コーディネーターが提案するプログラムや教材を体験していて、できれば児童生徒の成果の確認もできていれば、その情報を提供することで学校側も安心できます。

③ 身の丈にあった取り組みとすること。

いろいろな優秀事例などを見ていると「あれもやろう、これもやりたい」となってしまうがちです。ですが前述のように、児童生徒はもちろん学校・先生も一度に受け入れることのできる許容量には差があります。

防災教育に熱心に取り組めるところと、やむを得ずそうならないところがあるのが現実です。「身の丈」とはコーディネーター自身だけでなく、学校・家庭・地域全体の状況と言えます。

④ 様々な立場の関係者と積極的に交流すること。

コーディネーターは文字通り「調整役」ですから、コーディネーターだけで何かが終わることはありません。防災関係機関、福祉・ボランティア関係者など、様々な立場の関係者と交流すること、人脈やネットワークを持っていることが、防災教育コーディネーターの一番の強みと言えるでしょう。

自ら授業づくりや講師をすることが悪いわけではありませんが、あくまでそれは選択肢のひとつでなければなりません。「コーディネーター」として黒子に徹することもできるようにするためには、関係者との交流が欠かせません。

⑤ 明るく、楽しく、気軽に実行すること

コーディネーター自身が「明るく、楽しく、気軽」であることは、先生や生徒にも伝わります。「やるべきだ、やらなければならない」という意気込みは大事ですが、強すぎると「なんだか大変そうだな」と思われてしまいます。あまり入れ込みすぎずに、手軽なところから実践してみよう、という気持ちも大切です。

28～29

手引きではこうしたポイントをさらに細かく18の要素に分解しています。この項目をチェックシート的に使うことで「今回の防災教育はどのような条件で行えるのか」を整理することができます。防災教育を「やりっ放し」にしたくない、継続できるようにしたいというのは、学校・地域側も、コーディネーターも共通の想いであるはずですが、関わる相手の状況・立場を確認しながら、準備・実行・継続と進めていただくことが重要です。

防災教育コーディネーターに求められるは「私は防災に詳しいぞ！だからこれをやれ！」という”**自分に可能な範囲**”押し付けではなく、**関係者と信頼関係を築き、相手の立場を尊重しつつ、コミュニケーションをとり「この実施環境なら、こういうことができますよ」、「こんなテーマを、こんな人たちと一緒にやれたいですね」といった、可能性を提案していくこと**なのではないでしょうか。

30

さて、だいぶ時間も迫ってきていますがプログラム開発手法について触れたいと思います。これまでのお話はマクロな視点で防災教育を見たときに、コーディネーターとして重要なポイントでした。ここから先のお話は「個々の防災教育実践」というミクロな視点でのコーディネーターとして重要なポイントになります。

結論から言えば『**目標を明確にする力で防災教育の質を高める**』ということです。

31～33

プログラム開発において、目標を明確にする力は必須と言えます。誰かを道案内するとして「私（たち）はどこへ行くのか」をお互いに共有していなければ、案内のしようがありません。

せんし、知らない場所なら迷子になってしまいます。「目標」とは、文字通り標であり、到達点である「目的」に達するためのチェックポイントです。まずはそれを明確にできなければ、プログラムづくりには取りかかれません。

目標設定は具体的な行動と結びつけることを意識します。知識を確認する言語情報、身体の動きをみる運動技能、知識を活用する知的技能、学び方を考える認知的方略、関心や意欲につながる態度といった分類があります。例えば、気象用語をテスト形式で正しく答えられれば「言語情報」の学習成果・目標行動になります。ある気象用語を聞いた時に、どういった安全行動をとればよいか分かる(選択できる)のは「知的技能」の学習成果・目標行動です。ハザードマップがあることを知り、気象用語・安全行動が関係する場所を見つけようとするのが「認知的方略」の学習成果・行動となります。

それぞれの目標行動は、学習者(児童生徒)や学校・家庭・地域がもっている背景、前提条件も影響します。前述したように、いきなり難易度の高いテーマをぶつけても、学習成果・目標行動にはつながりにくいでしょう。**「その目標に達するために、必要な知識は何か」、「既に知っていることは何か」、「クラスの特徴はどんなものか(話し合いが得意、不得意など)」といった前提条件を忘れずに確認**します。

34～37

前提条件は評価に関係します。例えば**「元々説明できることを教えて、説明できるようになったという成果があっても、それが教育の成果とは言えない」と**いうことです。あるいは**「発達段階や現状の知識・技能にそぐわない高度な内容を学ばせても効果につながらない」と**いうことです。理解力などは個人差がありますから「防災について小学校6年生は●●は知っている・できる、でも◆◆は知らない、できない」と明確な線を引くことはできません。

成果の確認を厳密に行うためにはそのためには「何を知っていて、何を知らないか(事前テスト)」、「知るためには、何を知っていなければならないか(前提テスト)」、「何を知ることができたのか(事後テスト)」という3つが必要です。毎回行うことは難しいかもしれませんが、先生へのヒアリングや授業内での発問、振り返りシートなどである程度は把握することができます。

「主体的・対話的で深い学び」に代表されるような数値化できないことを成果で確認するのは難しいですが、この後のワークショップ資料にもあるように「指導側が伝えたいと思っているメッセージが伝わっているかどうか」を確認することができます。

ワークシートなどで要点が記述されているかどうかなどを判断基準として、目標が達成されているかどうかを数値的に示していくこともできますが、これはある程度実践が継続されてきたからのことかもしれません。最初はここまでの余裕はないかなと思います。

最後にプログラム開発で重要なことは「質を常に改善していく」ということです。ADDIEモデルに従って、目標を明確にすること、環境や条件を分析すること、適切なプログラムや教材、授業をつくること、評価を行い、改善につなげることが重要です。

改善の必要性をお話したうえで、皆さんにお聞きしたいことがあります。これまで、何らかの形で防災教育を実施したことがある、という方はどれくらいいらっしゃいますか？では、その中で「とても人に話せないような失敗をしたことがある」という方はどれくらいいらっしゃいますか。ありがとうございます。

防災教育の実践経験がある方は多いですが「失敗したことがある」という方は少ないようです。素晴らしいことだと思います。残念ながら、僕は「失敗」も多いのです。それでもこうしてこの場にいること、幼稚園保育園、小中高大、特別支援学校など様々な教育機関で防災教育実践を続けていられるのはその「失敗」が大きな教訓になっているからだと思います。代表的な「失敗」を3つ、ご紹介します。

1つ目は**「実施体制で無理をした失敗」**です。ある高校の体験学習で「避難所の状況を体験する」というテーマで企画しました。様々な防災体験ブースに、炊き出し訓練と、生徒会生徒による避難所運営本部ワークまで取り入れた盛りだくさんの内容です。多くのボランティアの方に交通費のみでご協力いただき実施しましたが、当日は大変でした。まずボランティアの皆さんへの指示が徹底できず、体験ブースの指導は中途半端になってしまいました。先生方は完全にボランティア任せになってしまい、ふざけている生徒への注意も行き届かずフラフラしている生徒もいました。生徒会は頑張っただけで本部を運営するも、その頑張りも他の生徒や先生に伝えられませんでした。おまけに**成果確認も行わなかった**ので、**結局、生徒に何がどう伝わったのかさえ、分かりません**でした。ヒト・モノ・カネ・ジカンをかけて大した成果もない。管理職の先生にはチクチク言われ、もちろん二度目の依頼はありません。

2つ目は**「実施環境を甘くみた失敗」**です。先の失敗を教訓に成果確認を行うようにしたのですが、ある学校での成果が極めて悪いという失敗がありました。振り返りシートを見たら、伝えたいことは書かれておらず、厳しい意見がたくさんありました。一番多かった意見の3つを要約するとこうなります。「暑い」「うるさい」「長い」。

いわゆる防災講話だったのですが、9月1日の始業式で行いました。まず休み明けで集中力が散漫になります。体育館に全校生徒がいて空調もないわけですから、僕も含めてとにかく暑い。うちわさえ使えない。久しぶりにあった友だちと話が弾めばうるさくもなりましよう。防災講話は始業式のセレモニー後ですから、既に飽々しています。本来60分の予定を40分で切り上げて「長い」と評されたわけです。こうなってしまっただけではテーマも何もありません。そもそも**「学ぶ環境」が整っていなかった**のです。

3つ目は**「目標を不明瞭にした失敗」**です。先の失敗を受けて、学習環境を整え、成果の確認も行いました。ですが、意外な結果が返ってきました。本来伝えたいメッセージとは異なることが多く記載されていたのです。生徒の注意・関心を引くために伝えた話やイラスト・写真が、本来伝えたい内容よりも強く印象に残ったことが原因でした。つまり**「何のために行う授業なのか」を明確に伝えてあげられていなかった**のです。

こうした失敗を積み重ねて作成したのが、僕の防災教育実践で用意している「3種の神器」、

プログラムリスト、授業パッケージ、学習指導案&振り返りシートです。プログラムリストは、実施条件や目標、必要資機材などをとりまとめた言わば「提案資料」です。必要に応じて先生や関係者に見てもらい、どんな内容・テーマがよいか選んでもらうための資料です。授業パッケージは、実際に授業をどのように行っていくのか設計するために使うテンプレートのパッケージです。学習指導案は、プログラムリストと授業パッケージの内容を簡潔にまとめ、担当の先生や管理職の先生にご説明・ご提供するために使います。振り返りシートは学習指導案とセットにして、指導案で示した目標が達成できているかどうかを確認します。

なお、振り返りシートは発達段階やテーマに関係なく同じものを用いています。これにより、どの発達段階に対してどういった内容が適切なかの、同じ発達段階で同じテーマの場合に違いがあるのかなどを把握することができます。

前述した2つ目の失敗を「失敗」と判断できたのはこのためです。同じ防災講話の内容を、空調の聞いたAV教室で1学年を対象にした場合は、伝えたいことが振り返りシートにも記載されていました。成果はプログラムリストに紐付けて記録します。これにより、どの発達段階にどのプログラムを実施したら、どんな成果があるかを事前に確認できます。

3 9

プログラムリストの一部をご紹介します。こちらは関東地方の海沿いにある某市で作成した「発達段階を考慮した、短時間で実践可能な防災教育プログラム」の一覧です。

4 0 ~ 4 4

地域での防災教育実践のスタートアップ例もご紹介します。これは千葉県の防災教育推進指定中学校で実践支援を行った際の流れとプログラムです。生徒や教職員を対象とした全体講話を行った後、教職員研修でプログラムリストを提供し、概略を説明しました。その後、学年毎に先生方が独自に指導案や資料を作成し、全校一斉公開授業では全学年全クラスで先生による防災教育が行われました。

4 5

また「科目横断型」の防災教育事例としては、田辺市立新庄中学校の新庄地震学が挙げられます。こちらは「防災教育チャレンジプラン」の実践団体として継続的に実践が行われており、最大の特徴は各科目の中に地震防災教育が取り入れられていることです。科目に取り入れること、そして実践の記録が詳細に残っていることで、先生が異動されても継続できる仕組みができています。

4 6

(現時点では非公開)

4 7 ~ 5 4

最後に既存の防災教育教材やプログラムについてご紹介します。発達段階や前提条件に応じた教材、プログラムを活用すれば、指導者・学習者双方の負担を減らし、かつ効果的な防災教育が期待できます。特に阪神・淡路大震災以降が多いと思いますが、様々な教材やプログラムが作成されています。

どれも一長一短があり「これをやれば絶対大丈夫と言える、完璧な教材」はありません。ただ、繰り返し述べているように「何のため」をきちんと把握してさえいれば、とても有効な教材やプログラムがあることも事実です。過去にいろいろな方が実践されて、ブラッシュアップされているものも多いので、最初のとっかかりとしては扱いやすいと思います。

ICTを使った教材、映像資料などもどんどん出てきていますので、機会があれば取り寄せたりダウンロードしたりして、実際に試してみてください。

本年7月2日に、東京・有明のそなエリア東京で「防災ゲーム Day2017」を開催します。スライドで紹介しているような教材のほか、各種資料、アイスブレイクで使った教材を開発したNPO法人によるプログラムや、「ある特徴」をもった地図を使った新しい防災教育なども紹介予定です。お時間がある方はぜひ、来場をご予定ください。

55

最後になりますが、改めて「防災教育プログラムづくりの基礎とは、目標をシンプルかつ明確にして、成果確認とフィードバックを行い、常に改善を続けること」です。本講義が、皆さんのこれからの実践に役立てば幸いです。

ご清聴・ご参加ありがとうございました。

56～61

(スライド記載のとおり)

一般社団法人防災教育普及協会

事務局長 宮崎賢哉

TEL. 03-6822-9903

<http://www.bousai-edu.jp>